おおさか KEYわーど 第14回

道頓堀にたたずむ街の記憶 文化復興によせる思い

写真：相合橋北詰にある南北の碑

東日本大震災で、各所に残る津波の危険を伝えた石碑がクローズアップされている。大阪にも石碑はある。道頓堀下流の大正橋東詰（浪速区）にある安政2年（1855）の「安政大津波碑」で、碑文には、字が消えないように、彫られた文字の部分に墨を入れるよう記され、それを今日まで守っておられる地元には頭が下がる。そして、いまだ避難所生活を強いられている方々の御心労を思いながらも、阪神・淡路大震災のときもそうだったように、営々と築かれてきた地域固有の“文化”が復興できるかも予断を許さない問題であることが気になりだした。それを考えていて思い出したのが安政の石碑の上流、道頓堀河畔にある、地震ではないが戦争によるカタストロフィーから大阪が復興したことを記念した碑である。

盛り場をむかしに戻すはしひとつ

日本橋より一つ西の相合橋北詰にある川柳の句碑である。作者の食満南北（けまなんぼく）（1880～1957）は、本名は貞二、堺の酒蔵家に生まれ、早稲田大学に学んで東京歌舞伎座の福地桜痴（ふくちおうち）の弟子となった。後の十一代仁左衛門である片岡我当に認められ、大阪に戻って初代中村鴈治郎専属の座付き作者となる。川柳「番傘」同人であったほか、絵も達者で、夏には道頓堀一帯に南北の描いた無数の洒脱な絵行燈が華やかに飾られた。昭和5年（1930）、天神祭の鉾流神事の復活に尽力したのも南北である。

南北の碑は、もともと戎橋の東にある太左衛門橋の北詰に建てられた。戦前の太左衛門橋は“南地情緒”あふれる古風な木橋であり、中座、角座などの“五座”が連なる道頓堀の芝居町と、富田屋や大和屋があった宗右衛門町の御茶屋街を結んでいた。小説家・織田作之助は『女の橋』『船場の娘』『大阪の女』の三部作で、主人公・雪子の人生の転機に必ずこの橋を登場させ、大阪大空襲で焼け落ちる橋の最後も雪子に目撃させている。

街のにぎわいを映し、大阪人の思いのこもる太左衛門橋が木橋として復活したのが、空襲から三年後の昭和23年（1948）。それを精神的、文化的な意味での大阪復興の象徴として詠んだのがこの句である。橋は昭和33年（1958）に頑丈な橋梁にかわり、南北の没後、昭和36年（1961）の彼の四回忌に、太左衛門橋の北詰に句碑が建てられた。碑の裏に由来を記すのは、大阪市名誉市民第一号となり、初めて日本芸術院恩賜賞を授かった日本画家・菅楯彦である。脇の碑には建碑の賛同者として錚々たるメンバーの名が刻まれている。ただし、時間の経過によって復興への強い思いが薄らいだのか、句碑は、昭和50年代に相合橋南詰めに移され、さらに現在地に移転された。数年前に太左衛門橋は再び木を基調とした橋に架け替えられたが、碑は相合橋に残ったままである。

私はこの碑を思うたびに、あでやかな句に託された先人たちの大阪の“文化復興”に対する強い思いを感じるのである。それとともに今はまだ表に出にくいかもしれないが、被災した東北や関東の人たちの胸中に宿る先祖代々築いてきた地域の“文化復興”への思いを感じないではいられない。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科（兼任）。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。